



皇帝戦士

ビッグバン・
ベイダー

ビッグバン・ベイダー

(BIG VAN VADER)

1955年5月14日生まれ、アメリカ・カリフォルニア州リンウッド出身。プロレスラー。学生時代はアメリカンフットボールの選手として活躍し、大学卒業後の1978年にNFLのロサンゼルス・ラムズに入団。1980年に解雇されるとプロレスラーに転身。1987年には新日本プロレスのリングにたけしプロレス軍団の刺客として登場し、以後は新日本のトップ外国人選手として活躍する。その後、UWFインターナショナル、全日本プロレス、プロレスリング・ノアにも参戦。日本の様々なトップレスラーたちと激しい闘いを繰り広げる。アメリカでもWCW、WWF（現・WWE）でトップを張った。その長い戦歴の中で、新日本のIWGPヘビー級王座、全日本の三冠ヘビー級王座、Uインターのプロレスリング世界ヘビー級王座、そしてWCW世界ヘビー級王座と世界中のトップのベルトをその手に収めている。2018年6月18日、肺炎のためこの世を去る。享年63歳。

「タケシ？ いや、私が初めて行ったのはイノキのプロモーションだよ」（ベイダー）

ガンツ 玉さん！ 今回の変態座談会はなんと、あの「たけしプロレス軍団（TPG）」が一夜限りの復活になります！

玉袋 ヲウチの刺客が帰ってきてくれたからね！

椎名 ヲウチのですか（笑）。

玉袋 ウチのですよ！ 今日には暴動覚悟の変態座談会だからね。というわけでベイダーさん、今日はよろしくお願いします！

ベイダー OK。でも、今日はインタビュアーが3人もいるのかい？

玉袋 そうなんですよ。軍団でやらせてもらってますんで。ベイダーさんも初来日はたけしプロレス軍団の刺客として登場したわけでもんね。

ベイダー タケシ？ いや、私が初めて行ったのはイノキのプロモーションだよ。

ガンツ いや、あの……新日本のリングなんですけど、ベイダーさんっていうのはその猪木さんを倒すために日本の有名なコメディアン、ビートたけしさんが連れてきたという設定だったんですけど……ご存知ありませんでしたか？（苦笑）。

ベイダー まったく知らなかったよ。

玉袋 まったく知らなかったんだ！ 全然、ウチのじゃねーよ！（笑）。

ベイダー 私のことは、マサ・サイトーが熱心に誘ってくれたんだけどね。

椎名 マサ斎藤さんもそのチームなんですよ。ビートたけしの参謀という設定で。いろいろ、ややこしいと思いますけど（笑）。

ガンツ あのベイダーさんの初登場はそういったコメディアン、芸能人がヒールとして土足でリングに上がってきたことで、あれだけプロレスファンのヒートを買ってたんです。

ベイダー ああ、そういうことか。やっとわかったよ。でも、まあおもしろかったよ。

玉袋 うん、おもしろかったことはたしか。大暴動になったけどね（笑）。

椎名 おかげで新日本は1年間、両国が使えなくなるという（笑）。

ベイダー あの日はいろいろあったが私の初登場としてはインパクトがあつてうまくいったと思うんだ。その理由はいくつかあつて、まず、あのミスター・イノキがいきなり私に完敗を喫したことで、その後、ジョン・ウエインのなヒーローになったんだ。

玉袋 西部劇みたいな展開になったってことか。

ベイダー 私は日本初登場の試合で、日本の英雄であるミスター・イノキをたつた2分で倒した。その瞬間、**ベイダー** はこれまでにあり得なかったモンスターになったんだ。一方で、それまでスターであったミスター・イノキはたつた2分で負けたことよって、なんとかこのベイダーという怪物にやり返し、自分の力を証明しなくてはならなくなった。そういうストリーが あつたからこそ、私とミスター・イノキの抗争は長く続いた。さらにイノキの敵討ちのために、弟子のフジナミ、ハシモト、ムタらがその後、私に向かつてくるという長いストリーができたんだよ。**ガンツ** そうですね。ベイダーさんは新日本の3世代とライバル抗争を展開したわけですもん



ね。

ベイダー だから、あの一晚だけで考えてはいけないんだ。たしかに最初の俺とミスター・イノキの試合はファンを怒らせたかもしれないが、それがあつたからこそ、のちに怪物ベイダーを日本人が倒すというストーリーにつながった。そういう意味であの晩というのは、ミスター・イノキが作り上げたとても考え抜かれたショーだったと思っているよ。

玉袋 なるほどなく。点で見るんじゃなく線で見るってことだな。

椎名 でも、あの両国は猪木さんが考えすぎて、裏目に出た気がしますけどね（笑）。

玉袋 翌日の東スポ一面の見出しは「猪木が悪い」だったからね（笑）。

ガンツ でも、初っ端は大暴動でしたけど、その後は「90年代最強のガイジンレスラー」の座を確固たるものにしましたよね。

椎名 うん。間違はなく、ナンバーワンでしょう！

ベイダー じつは日本に来るまではなかなかトップに立てずに燻っていたんだ。ところがあの一晚で、ロケットが発射されたようにプッシュしてもらえた。これまで日本に来た外国人レスラーの中で、あんなに素晴らしいスタートを作ってもらえたのは私だけだろう。だから凄くうれしかったよ。

ガンツ たしかにデビュー戦のお膳立てとしては凄いですよね。ビートたけしさんまで呼んじやってるわけですからね（笑）。

玉袋 まあ、おかげであのあと、殿の前でプロレスの「プ」の字も言えなくなっただけどね（笑）。でも、すげえはすげえ。あの煙が出る甲冑だって、カネかけてわざわざ作っちゃったわけだからね。

ベイダー あんなフルアーマーのコスチュームを作ってもらえたことにも感動したよ。それまでのプロレス界にはなかったものだからね。

ガンツ あの甲冑は制作費が5万ドルぐらいかかったらしいですよ。

ベイダー いや、もったかかったんじゃないか？ スモークを噴射するエンジンだけで、1万5000ドルはかかってたはずだよ。

玉袋 あれは日本の有名な漫画家・永井豪さんのデザインなんですよね。

ベイダー 有名な人のデザインで、サムライの甲冑をモチーフにしたというのは聞いていたよ。自分でも凄く気に入ってるんだ。

玉袋 新日時代のベイダーさんの試合だと北尾光司を潰した試合が俺は凄いい好きなんですよ。

ベイダー ああ、彼は最悪だったよ。

玉袋 最悪！（笑）。何が最悪だったんですか？

ベイダー 彼は私のことを恐れていたんだよ。だから本来スーパーヘビー級同士のド迫力のぶつかり合いを見せるべき試合なのにビビって向かってこないから、試合としては最悪だった。

玉袋 北尾はジョン・テンタ戦もそうだったもんなら。てめえがビビってるのに、「八百長野郎！」だからね（笑）。

ガンツ やっぱり外国人組の控え室なんかでも「アイツはダメだ」みたいな噂は立ってたんですか？

ベイダー いや、そこまでの男じゃない（キツパリ）。

玉袋 語るほどの男じゃないと（笑）。

ベイダー ただ、キタオだけじゃなくて私のことを恐れていたレスラーはたくさんいたよ。

ガンツ 真っ向勝負していた印象がある橋本真也選手はどうでしたか？

ベイダー 彼は怖がってなかったね。凄く強いハートを持ったレスラーだったよ。「ベイダーを倒して、自分がニュージャパンのトップになる」という強い意志を感じた。そういえば、彼はどういった経緯で亡くなったんだい？

椎名 もともと心臓が悪かったんですよ。それで突然亡くなってしまったんです。

ベイダー まだ若かったのにな。

ガンツ 40歳ですからね。だけど橋本さんが若くしてスターになったのはベイダーさんとの試合でガンガンやり合ってたからだと思います。

ベイダー 私はミスター・イノキやフジナミと試合をすることでスターとなり、その私と闘うことでハシモト、ムタ、チョーノはスターになっていったんだ。とくにハシモトは、彼ら3人の中でも最初に向かって来た男だった。それは彼が一番ビッグになりたいという気持ちを持っていたからだろう。だから自分から「ベイダーとやりたい!」と言ってきたんだろうし、やられてもやられても向かって来た。本来、彼はもつと長くトップとして活躍してもつと長くお金を稼ぐことができたはずなのに、それがあの若さで亡くなってしまったというのは残念だね。

玉袋 たしかにそうだな。体調管理に無頓着っつーのもあったんだろうけど。

「ベイダーさんはぶん殴りながら『ガンバッター!』って言ってたからね」(玉袋)

ガンツ あとベイダーさんが日本でトップ外国人レスラーの地位を確固たるものとした試合として、90年2月10日に東京ドームでやったスタン・ハンセン戦がありますけど、あの試合にはどんな思い出がありますか？

ベイダー とにかく目が痛かったよ(笑)。

ガンツ まず最初の感想が「目が痛かった」(笑)。

玉袋 そりゃあ、痛かっただろう。一瞬にしてものすげえ腫れ上がったもん。

椎名 目が腫れ上がって、マスクを脱ぐところが、ドームのビジョンに大映しになって、どよめきが起きましたもんね。

ガンツ あれは何が目に入ったんですか？エルボーですか？

ベイダー いや、サミングだよ。

玉袋 サミングだったんだ！（笑）。それは故意にやったのかな？ アクシデント？

ベイダー わざとに決まってるじゃないか。えっ、日本では故意じゃなかったと信じられてるのか？

ガンツ そうですね。前にハンセンさんにインタビューして聞いたときは、「目が悪いから、間違えてエルボーかナックルが入ってしまった」って言ってましたけど（笑）。

ベイダー ありえないよ。まあ、あのとき彼は私より10歳ぐらい年上で体力的には少し下り坂に入ってきていた。また、私は体重が200キロ近くあったから体重差も60キロ以上はあっただろう。そんなデカくて若い私がガンガン攻めていったので、彼がやり返すにはあれしかなかったんだろうな、といまは理解しているよ。

玉袋 じゃあ、ハンセンの中の猪木イズムっていうのかな。いざとなったら目をくり抜いても勝つっていうね。

椎名 ゴッチだったらケツの穴で（笑）。あの試合のあと、目の手術をしたんですよね？

ベイダー そうだよ。おかげで手術代もずいぶんかかったよ（笑）。目が腫れるだけならなんてことないんだが、目の周りの骨が複雑骨折みたいになってしまってたね。いまでも、この鼻の上の部

分にスチールが入っているんだよ。目が折れたことで鼻のほうにも影響しちゃってね。

椎名 それもハンセンのせいですか!?

ベイダー そうだよ。この目の周りの骨が全部ダメになったんだ。

玉袋 じゃあ、あの試合以降、ハンセンさんと会ってもギクシヤクした感じだったんですか？

ベイダー いや何も無い。彼とは友達だよ。

ガンツ ハンセンがWWEの殿堂入りしたとき、ベイダーさんがインダクターを務めていましたもんね。

玉袋 怨讐を超えて、ああいう晴れの舞台で再会するっつーのがいいね。逆にベイダーさんが試合中、対戦相手にしかけたりとかフックしたりとかっていうのはあったんですか？

ベイダー いや、私はやったことないよ。

玉袋 そのへんはプロですね。

ベイダー そんなことはやるべきじゃないからね。もし、それで優位に立ったとしても自分が勝ったとは言えないしね。プロレスにおいては、試合とはいえ対戦相手は「敵」というより一緒に仕事をしている「仲間」という意識のほうが強いよ。ただ、当時のスタン・ハンセンは立場上、ああいうルール破りをしたのも仕方がなかったかなとは理解している。

玉袋 新日と全日のトップ同士の対決であり、またガイジンの新旧世代闘争みたいなもんもあつたわけだもんね。

椎名 ベイダーさんもやっぱり団体を背負ってるという意識はあったんですか？